



一般
社団

日本盆栽作家協会会報

第27号

令和元年 11月1日



盆栽は作家なくして作品なし 作品なくして芸術なし

盆栽は、十年手元に持つと、真に自分の「作品」となります。十年といわないまでも、最低でも五年は手元に持つて自分の「作品」として愛情をかけて欲しい。

それくらい心の余裕が無くては、楽しさがわいてこないし、心の眼も、真の審美眼も開けません。

そして、作家としての目的意識を持ち、個性的な作意と創意で作る。そこで初めて芸術たりうるものが誕生するのです。

日本盆栽作家協会は、盆栽界の発展のために真の盆栽の「作家」を育てていきたいと考えています。

第27回作家展

会期／前期 平成30年11月23日(金)～11月28日(水)
後期 平成30年11月30日(金)～12月5日(水)
会場／さいたま市大宮盆栽美術館
主催／一般社団法人日本盆栽作家協会

前期



第27回 作家展 展示風景



真柏 鉢：山秋正方 吹田 勇雄（宮城県）

北海道知床で山採りされた真柏を糸魚川性に衣替えをして20年位なります。世界に広がる盆栽の樹形は、三角に作る日本の型が主流ですが、今、私が主に活動の場所としている中国はそれにとられない独創的な盆栽が多々あります。本樹も独創的だと思いますので、今後どんな変化をするか楽しみです。



ぶな 鉢：瑠璃広東長方 山田登美男（埼玉県）

黄葉おうようの代表する木の一つ。滑らかな白い幹肌とは裏腹に、強かな幹は優雅に枝を配り、葉先までその迫力を伝えています。紅葉後、葉が固くなり外反するところに、また趣が感じられます。本樹は、私が40年来作り続けている一鉢。瑠璃釉広東長方鉢で培養しています。



山もみじ

鉢：和長方

菊岡 成泰（奈良県）

幹が二つに分かれた「双幹」（そうかん）の山もみじです。荒々しい幹肌の松柏類と対照的に清らかで素朴な白さを持っています。春のゆったりとした芽吹き、颯然と暑さを凌ぐ夏を経て迎える秋の表情は実に鮮やかです。

ひのき 檜

鉢：紫泥長方

矢内 信幸（大阪府）

檜は常緑樹の類でも濃緑が映え、気品高い立ち姿が印象深い樹です。素朴な一つ一つの樹皮は時折剥離し、年齢を感じさせます。軽妙に立ち上がる華奢な幹から伸びる細やかな枝葉は、大自然の奥地に生きる静寂な佇まいを彷彿とさせます。





真柏 鉢：和長方 山崎 純一（富山県）

この真柏は、約25年前に挿し木をして、それ以来、大切に育ててきました。幹の味わいや枝のほぐれ等はまだまだこれからですが、今後、より真柏らしい厳しさを表現できますように努めたいと思います。



五葉松 鉢：古渡烏泥外縁長方 須藤 雨伯（栃木県）

実生から仕立てた樹齢51年の五葉松です。銘「気寿」は、上寿（120才）まで元気に育ててほしいとの願いから銘名したものです。古代中国の不死幻想や神仙術、上寿は、中国の三教のひとつ「道教」に由来するものとされ、それらを体現しようとしたものが盆栽の源流といわれています。私も盆栽と共に生き長寿を全うしたいと日々精進しております。



五葉松

鉢：行山長方

阿部 健一（福島県）

実生から仕立てた樹齢60年の五葉松です。実生6年の時に、先代に「畑作りでも山木に負けない素材を作る事が出来る」と教えを受け、一つ一つ仕立て方を聞きながら、畑で25年間培養して、29年前に鉢上げをして整形をしました。その後、何回も手を入れて今に至ります。太くて短く、ドッシリとした落ち着きがある大木然とした老樹の姿を目標に、培養を続けています。

五葉松

鉢：紫泥木瓜

米沢 増雄（東京都）

幹模様を生かした作品で、いわゆる山あじのきいた文人風な雅趣のある風情を感じさせます。木瓜式の変り鉢を合わせ更に調子を高めました。



高木盆栽美術館が主催した 「盆栽の器展」の意義と展望



テーマ：陽春の五竹（彩花盆栽） 姫孟宗竹 寒忍 雪柳 盆栽作家 山田登美男
鉢：「深厚耀彩盆栽鉢」（最優秀賞） 盆器作者 徳田八十吉



一般社団法人日本盆栽作家協会
理事長 山田登美男

高木盆栽美術館がようやく軌道に乗り、次のステップを求めた当時、私は美術館の顧問として次の提案をしました。当時は中国の古渡鉢をかなり収集していたこともあり、その価値観を評価してもらう上からも日本国内の陶芸家の方々に盆栽の器を公募して作品展をやってはどうかと。

その提案に賛同頂き、具体的方策を立てることになり、まず第一に審査委員長を決めようと、日本伝統工芸展の委員長であった林屋晴三氏を推挙したところ、高木社長も直ぐ応じて頂き、二人でお願いのご挨拶に行った。（林屋氏は、生花の草月流会館（東京本部）の二階に部屋を持っていた。）説明を申し上げましたところ心良く引き受けて頂き、順調にことが運んだ次第であった。

最盛期は全国より約3000点の応募があり、その中から8〜10点、

賞対象を審査員が選び、賞金は総額300万円を高木財団より用意し、グランプリ作品には100万円が贈呈された。

第二回展においては、徳田八十吉（12代目）氏が受賞された。

日本盆栽作家協会は、側面から協力し入賞作品にそれぞれ盆栽作家が植栽して会期中展示して大きな反響があった。

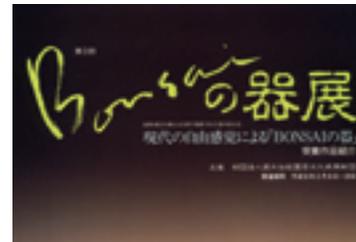
徳田さんの作品には皆さんの要望もあり、私が植栽することになった。題名は「陽春の五竹」として花を添えられたことは今でも想い出深いものがある。

後日、徳田さんより作品ごと借して欲しい由相談があった。運悪く病気になる実現しないで終わったことは残念であった。

今、私は大宮盆栽美術館の管理官として是非このような提案をしたいと考えているところです。

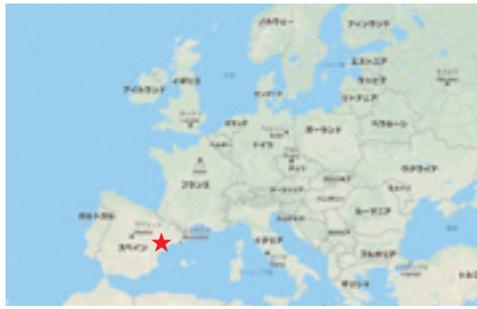


左端から、筆者、徳田氏、林屋氏、高木氏。



盆器作者 徳田八十吉

SAKKA TEN 2018 SPAIN



一般社団法人日本盆栽作家協会
理事長 山田登美男

今回、本部より山田会長、デモンストレーターとして秋山氏、私設秘書（通訳）兼助手として石原氏の三名が参加しました。
11月2日（金）のワークショップ後、夕方より、地方自治体のレセプション、続いて午後8時半より公式の歓迎セレモニーが開催され、市長挨拶、筆者挨拶、そしてスペイン支部のザビエル会長が挨拶されました。
今回もイタリアからヨーロッパ支部のロレンツォ会長、ロッシ副会長や妻達等約20名の関係役員が出席され、市民上げてのお祭り行事のようで少々驚きました。
作家展は会期四日間、連日、デモンストレーションが行われ、秋山氏や支部のマスタークラスの人も

大変な努力され人気も高まり非常にいい催しとなりました。
おもしろいイベントとして、スペイン料理で有名なパエリアを約200名の関係者全員で大きな鍋で半日位にかけて煮ながら、専門の料理職人4～5人と作り上げた「おもてなし」には感動しました。
最終日に支部のマスタークラスの出席者50人に対して筆者の「盆栽の作意の心と飾り方」の特別講義を開催しました。
その後、バルセロナでピカソ美術館等見学しました。期間中を通して、清香園にて修行した支部のラモン氏が送り迎え等々いろいろ世話してくれて楽しい旅となりました。



◎ 展示風景



◎ 開会式





◎ 景道講演



◎ 大会スナップ

上) 大鍋でパエリアを料理する筆者。右上) 右端から筆者、通訳のトリーニ氏、スペイン支部会長ザビエル氏。右) みんなで食事。

◎ ワークショップ



◎ デモンストレーション



村興しに協力!

2019年7月15日～18日
中国上海 崇明島 港沿鎮園芸村

私の園で修行した上海崇明島の陳怡君からの依頼で盆栽のデモンストレーションを頼まれた。場所は崇明島の港沿鎮園芸村である。

村では大量の黄楊木(ツゲノキ)を生産し庭木や、黄楊木の工芸品を作っている。その中に黄楊木の盆栽も入れて村興しを計画しているのである。それで私を招いて黄楊木を使って盆栽にするデモンストレーションを行わせていたのである。

園芸村に着くと私を歓迎する看板が沢山立っていた。政府の役人さん達が農園を案内してくれた。デモの会場には村民だけでなく上海市の大学生がバスで一時間半もかけ見学に来てくれた。神君の通訳で弟子の黄君と周君が私の助手をしてデモンストレーションが始まった。

黄楊木は葉が小さく密になるので盆栽に適した樹種であるが、花が小さく実も地味である。中国人の多くは派手な華美装



崇明島港沿鎮園芸村中央の盆栽園

※ 詳細記事は、http://nbsk.info/shanghai_kobayashi.html を参照ください。

フィリピンの盆栽

2019年3月22日～25日
於フィリピン・マニラ

フィリピン盆栽協会のボビー会長の依頼で3月21日、成田からマニラ空港へ妻と向かった。会場は巨大モールの中央にあるイベント広場で行われた。夕食を済ませてから300点ある盆栽の審査を私の他に台湾のデモンストレーター2名と3人で審査をする事となった。水石の審査は元BCI会長のトーマス・エリアス博士が一人で行った。展示会場が広く数が多い為に審査が終わったのは夜中の2時半を過ぎていた。

今回の大会はフィリピン盆栽協会と水石協会に池の坊フィリピン協会の協賛による催しであった。初日の午前中に開幕式挙行され午後から私のデモンストレーションが披露され、通訳には台湾の梁悦美教授がしてくださった。

梁教授ほど世界に盆栽を啓蒙した女性はいないであろう。2017年には台北の広大な敷地に盆栽美術館を設立するくら

い盆栽が好きであり、盆栽界への貢献も大である。

デモンストレーションの通訳はある程度盆栽を理解した方がしてくれると助かる。今回の私の素材は真柏でした。樹の持つ個性を生かす為に正面と植付け角度を変え、会場から2名のアシスタントに手伝ってもらい約2時間で仕上げました。

最後の日はダバオの市役所へ市長と大統領の娘さんを表敬訪問し、2021年にダバオで大きな盆栽大会を開催する後援のお願いに伺った。フィリピンには小さな盆栽会が沢山あり、それをロベルトボビー氏がしっかりとまとめ協会を運営している。

私は今までに30カ国を歩いて来たが、最近特に東南アジアに招かれる事が多い。アメリカの盆栽会は日本と同じで愛好家が高齢化しているようだ。

※ 詳細記事は、http://nbsk.info/Philippin_kobayashi.html を参照ください。

作家展主旨

本協会が主催する作家展は、生きた伝承芸術、盆栽作家の精神高揚と高度な盆栽美を作出することにあります。

盆栽作家は人間性の豊かな感性を磨き、自然愛を基本とした芸術を作品に表現されること、最も大切であり、お互いを研鑽し合い、盆栽文化の一層の発展を切望するものであります。

しかし、盆栽作家をめざす条件は大変に厳しく、自然との調和を図り、永い修練の中から体得し、その積み重ねから美の心を包含する作業であります。今日の作家群が明日の社会にクリエイティブなボンサイ・アートとして、環境保全等に貢献できることを期待いたします。



第27回作家展 後期

山もみじ 鉢:和鉢 小林 國雄 (東京都)

第72回国風盆栽展で「国風賞」を受賞した作品です。広大な座にすんなりとつながる足元の広がりが見事。伸びやかなモミジらしさと品格が感じられます。



「日本盆栽作家協会」法人化にあたって

弊会は令和元年六月二十一日、一般社団法人日本盆栽作家協会を設立し、新たに法人として活動を開始することとなりました。これもひとえに皆様方のご厚情とご支援の賜物と心より感謝申し上げます。

この度の法人設立を機に、盆栽の芸術的、社会的、国際的評価の向上及び盆栽作家の養成に、より一層力を尽くしてまいります所存でございます。何とぞ従来に増してのご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます

令和元年 七月吉日

一般社団法人日本盆栽作家協会

理事長 山田 登美男

一般社団法人日本盆栽作家協会 規約 (抜粋)

(入会) 入会にあたっては、推薦人1名が必要。

(会員たる資格の取得) 入会金10万円。

(会費) 会員の会費は以下に掲げるとおりとする。

(1) 正会員 年10,000円

(2) 賛助会員 会費は徴収しない

(3) 名誉会員 会費は徴収しない

(費用負担) 正会員及び賛助会員は、本会が主催する作品発表会、展示会等に作品を出品する場合には、その管理料、運営費等として金10,000円を納めるものとする。

小林國雄の海外交流記②

胡樂國追悼盆栽展

2019年8月9日～10日

中国温州雪山飯店

中国の盆栽界に大きく貢献をした胡樂國先生が、昨年の8月に亡くなられ、今年の8月9日、10日と温州の雪山飯店で追悼盆栽展が開催され、私も招待され弔辞を述べた。会場には先生が創った盆栽が百鉢近く飾られた中で盆栽討論会が開かれた。胡先生の作風は大自然の風雪や厳しい環境の場所を「試練を生き抜いた一生の厳しさ」を表現した作風である。また鉢合わせのセンスも群を抜いている。なによりも胡先生の偉業は中国盆栽の普及と発展に大きく尽力された事です。多くの盆栽愛好家の指導と弟子達を育成した立派な人物でした。いたらない私のような人間でも盆栽を愛する情熱を高く評価して頂き、心より感謝しております。

胡樂國先生の教えは私を始め多くの盆栽愛好家や弟子達の心の中に生きています。私が中国から学んだ事は、日本で多く見られる三角形の同じ型をした盆栽ではなく、伸びやかで風趣風韻があり空間を創り幹や枝の線を引き出した作風である。

日本の盆栽は規格に嵌まった樹形が多く、国風展などを観てもほとととする樹が少なく疲れてしまう。私も盆栽を45年やって来てやると盆栽が少し観えて来たところである。日本の盆栽作家では清香園・山田登美男氏の作品には彼の盆栽に対する執念と心が感じられる。日本の若い作家がもつと目的意識を持って自分の作品を創り出して欲しいものである。



悪天候を乗り越えての参加

※ 詳細記事は、http://nbsk.info/shanhai_kobayashi.html#tuionを参照ください。



五葉松 鉢：和正方 今井 千春（神奈川県）

この五葉松は15年ほど前に入手したもので、当時は枝が間延びしてとても盆栽と呼べるものではなく、針金掛けによる締めこみで現在の姿になりました。時を経る事により樹格を増し、「国風盆栽展」への出品も果たして現在に至ります。



黒松 鉢：額面隅入外縁長方 養田 昂之（東京都）

この樹は、熊本県北部の小岱山（しょうだいさん）で大正時代に採出されたものです。細かく屈曲した幹と「龍鱗千枚皮」と呼ばれる皮性が小岱松の特徴とされております。枝を継ぎ直してからの持込みが若いのですが、時間をかけて黒松らしい力強い枝を表現していきたいです。



五葉松

鉢：和正方

秋山 実（山梨県）

入手時は、何も手がつけられておらず、「盆栽」ではなく鉢植えでした。この五葉松の特徴は左に大きく伸びた枝です。自らの重みで下がって育ち、それに応じて主幹も左側に動いています。この見所を生かすように、右の一の枝も下げるによりバランスをとりました。幹味の古さを生かしつつ、左の枝を最大の見所として作り上げ、現在の文人樹形となりました。整姿技術により盆栽を作ることよりも、その木の持ち味を生かし作ることが心げました。

山柿

鉢：和楕円

風間 雄一（千葉県）

山柿は、秋の深まりと共に色付き、日本の原風景を彷彿とさせてくれる魅力があります。本樹ほど大きな山柿の盆栽は珍しく、たわわに実を結んだ樹の姿は、見る者の心を和ませる作品となっていると思います。





赤松 鉢：紫泥丸 福館 治（岩手県）

立ち上がりから、幹が裂けて木質部の表出した「サバ」を嚙んで下向する幹には、自然樹の厳しさが感じられます。この赤松の自然味を引き出したく、極力、枝葉を抑える作業をしてきました。赤松らしさとは何か？ 考えさせられる一樹です。



五葉松 鉢：紫泥楕円 高津 政之（千葉県）

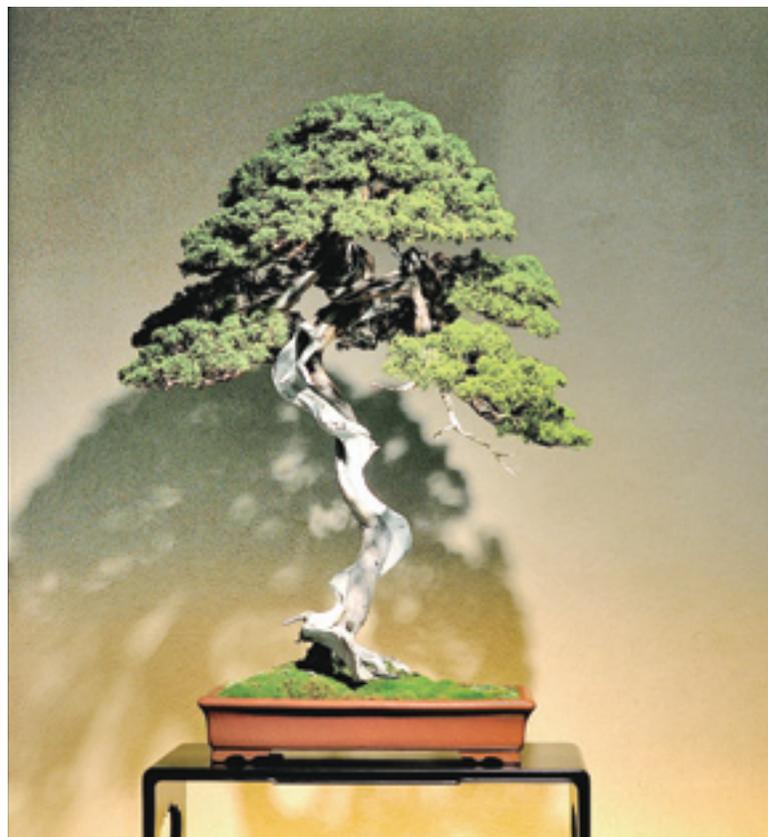
細幹ながら古色を帯びた幹肌と、軽妙なバランスを保った親子の仲睦まじくも凛々しい姿に見惚れて手に入れました。整姿については全体の流れがひきたつように気を配りましたので、心に留めてご観賞いただけたら幸いです。

真柏（銘：月光）

鉢：古渡梨皮紅泥長方

馬場 守一（群馬県）

すらっとした樹形なので、枝葉は重複する要素を省きながら、軽くなるよう剪定をしました。水吸い、シャリ、枝葉のバランスに気を配りながら管理をしています。まだ真っ直ぐな線の枝や、水吸いの整形など、調整する箇所がありますので、木の状態を見ながら作っていかうと思います。



山もみじ（紅千鳥）

鉢：白交趾長方

塚田 博巳（茨城県）

もみじの品種「紅千鳥」は、春に赤い芽吹きを見せることが特徴です。本樹は樹齢35年になります。はじめは双幹ではなかったのですが、だんだんとイメージがわいて手を加えていき、今の樹形を造り出しました。



